



絵と文・前川朋子



47

麻生区
文化協
会報

芳林山 戒翁寺

緩やかな早野丘陵の古道。森、竹林、畑が広がり、のどかな静寂の風情。とても鎌倉街道沿とは思えないほど穏やかな所に、曹洞宗戒翁寺が佇みます。

天正年間（一五七三年～一五九二年）に片平修廣寺三世貴山玄頓和尚を招き、開山。山号を芳林山、院号を向嶽禅院と称し、如意輪観世音菩薩を本尊とする曹洞宗戒翁寺として発足しました。

寛永五年に富永重吉七十六歳の時、堂守を再建し開基となりました。徳川家康により朝鮮の役に召しだされ、兵法・武術に秀でた重吉は活躍、文禄三年に都筑郡早野村二五〇石を賜り、早野の地を治めた最後は御鎗奉行として九十六歳で没し、戒翁寺に葬られました。

慶安二年（一六四九年）には、この地で珍しくも御朱印五石五斗を徳川幕府より拝領し、現在もその墓は、殿様墓として当寺に残っています。

小高い丘を上がると史跡・殿様墓があります。墓の下は畑が広がり、そこからは戒翁寺が一望できる所がありました。

参考「戒翁寺の案内書」

「文化育み 輝けあさお」二十五周年を迎えて

麻生区文化協会 会長 菅原 敬子

一九七九年、「川崎北部に近代的市民館の建設を」と藤田親昌氏を代表とする広範な文化人・市民等の熱心な運動によって、文化の拠点づくりがスタート。署名六万五千人、募金二百七十九万円が集まりました。

多摩区から麻生区が分離したのは一九八二年で、麻生区文化協会は一九八四年十一月十日に発足しました。設立するまでには大いに議論し、①地域をあげた文化協会にしよう、②新しい質の高い文化協会をめざそうと、しっかりと基盤をつくって七団体・個人会員九十人によりスタートしたと記録されています。

それから二十五年が経った今、新しい街が誕生し、その街を「芸術のまち」にしていこうと精力的に行政・市民とともに取り組みを進めています。当時予想した以上の賑いと文化的施設の整備がなされ、地域の文化への認識も高まっているといえます。

この会報「からむし」も一九八六年十一月十日に創刊されてから今回で「四十七号」になりました。こうしてみると、歴史の重みを感じさせられ、「文化協会の会長を引き受けてよかったのかなあ……」との思いにかられます。

二十五周年事業への提案

一つ目は、二十五年目の歴史のページを書き残しておくことです。

活動は積み重なっていても、時の流れとともに不鮮明になります。いきいきとしたその時代の活動を記録しておきたいと思えます。多くの団体の紹介もできたらページをさいて記録できたらいいと思えます。二つ目は、新ゆり美術展の開催です。

新百合21ホールがギャラリー仕様に変更されたのを機に二〇〇九年三月三日～八日、アルテリッカ芸術祭のプレイベントとして「新ゆりプレ芸術祭美術展」を開催し、

千六百人を超える方々に鑑賞していただき好評を得ました。その実績を評価していただき、今年度も文化財団のご支援を受けて、同会場で三月二日～七日、新ゆり美術展を開催できる運びとなりました。来年三月一日には二十五周年記念講演・公演、式典を市民館で開催します。記念パーティーは、美術展と併せて新百合21ホールで開催したいと思えます。

美術展は美術家協会との共催で行い、その内容についてはみなさまの知恵やアイデア、そして協力により前回にも増して充実したものにしていきたいものです。

三つ目は、麻生の文化「花咲き・実みのり・鳥さえずる」をもとにした麻生区のデザイン・キャラクター等の作成です。

麻生区には区の花や樹・鳥が決められています。多摩区はすみれ・梨、川崎市はつつじ・椿です。今後、麻生区制三十周年に向け、市民・区民による公募と投票で決

めていってはどうかと文化協会として区長に提案しています。区として予算要望を出してくださっているとうかがっています。

まずは、二十五周年を契機に文化協会から提案していきます。手順をふみ、市民・区民の力で決めることができるよう進めて参ります。

四つ目は、

「文化育み 輝けあさお」が二十五周年のキャッチコピーです。

例年行っている文化祭をはじめ、年間行事についてもこれに合うよう工夫し、濃い内容になるようにしたいと思えます。

二十五周年を更なるステップにし、常に新しいものをめざし提案し、できることからやっています。



ハンガリー・スロバキアへ
2007.7.22～8.4 12th FOLKLOR FESZTIVAL
参加出場

拓本の楽しみ

渡邊芳園

拓本（石摺り）とは、石や金属等に刻された文字や絵画等を紙に写し採る事です。

拓本の技法は中国で開発され日本に伝わりました。その時期は遣唐使を派遣した奈良時代で、当時は見向きもされなかったと言われています。

中国では平和な唐と宋の時代に盛んに採拓されました。為に国宝級の有名な石碑の九成宮醜泉銘碑等は採り過ぎで碑面が擦り減ってしまいました。その背景として、科挙制度（官吏登用）の試験科目に書道があり、上達法に拓本が利用されたのです。写真や印刷の無い時代に、金石に刻された古人の優れた筆跡を学ぼうとして生み出された知恵といえます。書道の発展は、拓本に負う所が大きく千数百年を経た現在、本格的に書道学習方法は基本的に変わっていないと思います。今でも古い拓本は直筆（じきひつ）の書に準じて珍重されています。

私は、五十年近く前、笠原秋水先生の横浜国大の先輩で短命の天才書家「故・和泉幽仙先生」に拓本の採り方・楽しみ方を教えて頂きました。以来、書道と共に趣味として続けております。

今までに三百本近くの石碑の採拓をしました。その中で印象的な出来事を紹介します。

軽井沢の室生犀星の詩碑の時、アメリカ人のグループが熱心に見学し「何をしてるの？」と尋ねら



群馬・水沢観音 山村暮鳥詩碑の拓本を採る筆者

れましたが、英語の苦手な私は、身振り手振り、片言の英語で歴史と採り方を説明。冷や汗一斗。仙台の青葉城址では、土井晩翠荒城の月の碑で、定期観光バスのお客に囲まれ、採拓終了後ガイドさんと私が音頭をとり、♪春高樓の花の宴♪と皆んなで楽しく合唱。

菊花展と戊辰戦争の悲劇・少年隊で有名な二本松城の智子抄碑では熱心なギャラリィに、一枚差し上げた所、お礼にと安達町内を車で案内して頂き、楽しした事。

数年前、三月の寒い早朝、川崎中原区にある常楽寺（通称マンガ寺）で岡本一平の自画像碑を採拓中、急な雨で、途中で止める訳にもゆかず、碑に傘をくくりつけ、本人はずぶ濡れになり、風邪をひきそうになり妻に「あなたも好きねえ！」と皮肉を言われた事等特色々な事がありました。

拓本の楽しみは、四つあると思います。

- ①採拓後の鑑賞の楽しみ
- ②建碑の由来（周囲の環境等）を調べる為、現地での聞き取り、取材や歴史書・文学書を調べ、紀行文をつくる楽しみ



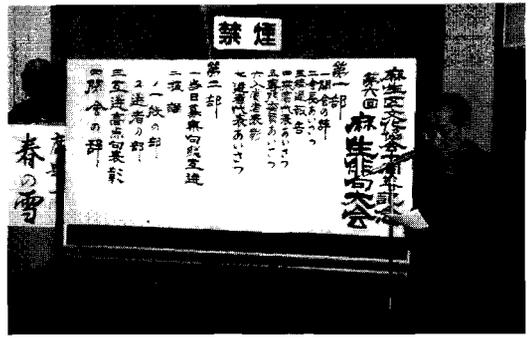
長野・軽井沢 室生犀星詩碑

③取拓作業は、かなりの体力と微妙な手先の技術が必要なので、健康維持とボケ防止に最適

④旅行と同じ感覚で新しい発見と人との出会い

川崎市内には、正確な数は分かりませんが、百六十本近くの文学碑（詩碑・歌碑・句碑等）があります。麻生区内には、王禅寺の北原白秋詩碑、草木工房の若山牧水歌碑と島崎藤村詩碑、善正寺の橋田東声歌碑、高石神社の芭蕉句碑（奥の細道・月山での句）等百本以上の文学碑が有ります。今後は、今まで集めた物の拓本展を開催したいと思っています。

（凌雲社 同人・理事）



俳句大会の司会・水上さん

ふるさとを愛する

山田土筆(昌一)さんは、私学で数学の教鞭を執る傍ら絵筆を握り、細山を描き続けてきた。そして、平成八年に自宅の一部に「山田土筆細山美術館」を開館した。そのとき、「私設学芸員だよ」と笑いながら暇があると足を運び、協力していたのが水上馨さんであった。生まれ故郷の細山を中心に描き続けた来たのは山田さんの郷土愛である。水上さんは東京生まれであるが、麻生区金程に終の栖を構え、ふる里とされた。二

学究・実践の徒

水上馨さん

麻生区文化協会顧問 杉本長治

人の交友が濃密になったのは、郷土を愛するという二人の共通した思いがあったのだろう。

いなだ子ども風土記

「からむし」四十六号で前・麻生図書館長の鈴木隆さんが、水上さんの事を書かれておられる。その中に「いなだ子ども風土記」がある。私も執筆者の一人であるので、当時のことを書いてみる。

水上さんは、四十歳前に稲田図書館長になられたと思う。異例の出世である。

水上さんは、子ども風土記の発刊を企画された。川崎の郷土史家の第一人者である白井禄郎先生と

の出会いから生まれた事業である。今までの図書館では考えられない事業の発想であった。水上さんは図書館長になる前、川崎市教育委員会「給食」「修学旅行」などを手がけられ、子どもに対する思い入れが強く、「子ども風土記」で子ども達の郷土愛を育てたかったであろう。

そのことは、第一巻「いなだ子ども風土記」その一・農業編の前書きで分かる。

水上さんと白井先生の企画によって発刊計画が立てられたが、素人の私たちは初めてのことなので大変でした。主に夏休みを使い編集会議、取材、原稿書き、そして原稿検討と進むわけですが、●取

材が十分でなく大事なことが抜けている ●表現が子ども向きでない、などと指摘され、再取材、原稿の書き直しなどで苦労しました。それだけに「いなだ子ども風土記」が発刊された時は感動しました。

続いて第二巻「衣食住」編、第三巻「年中行事」編、第四巻「子どもの遊び」編、第五巻「変わりゆく郷土」編の発刊で完結する。

私たち教師として得難い経験であり、白井禄郎先生、水上馨さんの発想力、企画力、行動力から学んだ貴重な年月でした。

その「いなだ子ども風土記」は三十数年たった現在も、市内図書館や学校図書館の書架で色あせず子ども達を待っている。

行政では

稲田図書館(現・多摩図書館)で画期的な仕事をされた水上さんは、その後、本庁に戻り、市民局交通安全対策課長として折から激しくなった交通問題の解決に当たり、八十年代に川崎が直下型地震の震源地と予想され、土木局に「防災対策室」が出来、川崎区小

田に出来た巨大な「防災センター」の所長として防災に備え活動され、昭和六十三年に退職された。詳しいことは分からないが、水上さんは、その時々で市政の課題解決に当たられ、大きな足跡を残された。



いなた子ども風土記

企画・推進力の水上さん

水上さんと私が文化協会にお世話になったのは、昭和六十三年。当時のことは良く分からないので、箕輪敏行顧問にお聞きした。

「水上さんは、確か藤田親昌会長の推薦で入会された」と記憶して。そして、いきなりアカデミ―副部長でした。私が部長でした。

アカデミ―部は地域を歩き、地域から学ぶ『雑学教室』と言う特色ある活動をしていましたが、水上さんは『いなた子ども風土記』を出版されたことから分かるように、地域が分かり良い企画を出されたり、講師を受けてくれたりと有り難い副部長でした。

水上さんは入会翌年には、総務に抜擢されました。とにかく、企画力、行動力は抜群でしたね。そうそう、麻生区文化協会の特色ある俳句大会の運営や、古風七草粥の会も熱心に行ってくれました」

巷談会

「巷談会をやろうよ」と水上さんが言い出したのは、平成十年頃だろうか。山田さんの美術館を会場にして、山田さんの絵のこと、細山のことなど思いつくままお喋りをした。いつまで続いたか定かでないが楽しかった。

お茶と駄菓子で自由な会話を楽しもう、と言うのである。

酒を愛する水上さんと、お菓子を愛する山田さん、意外と気があったのは不思議である。水上さんと山田さんの人柄である。

資料の電子化

からむし四十六号で、前・麻生図書館長の鈴木さんが「昨年なくなられた水上さんの蔵書五百冊以上寄贈して頂き、記録されたフロッピーディスクを借用して電子化作業を進めている」と書かれている。

図書館で五百冊もの図書の寄贈を受けると言うことは、水上さんがいかに貴重な図書を収集されていたか分かる。水上さんは図書収集に熱心であり、更に、調べたことを丹念にワープロに打ち込んでおられた。細山の記録、文化協会の活動の記録など何部か戴いたが、綿密な記録に頭が下がった。その水上さんの努力がデジタル資料化され、そのうち市民に読まれ、地域文化の向上に大きな役割を果たす。

水上さんの偉大な業績である。水上さんは、そのうちワープロでは物足りないと言いつ、パソコンを買われた。講習会に出て熱心に

取り組んでいたが「パソコンは難しい」とのボヤキも耳にした。駆使出来るようになったのだろうか」と人ごとながら気になった。

その水上さんも平成十七年に倒れられ、入院治療の甲斐もなく平成二十年に帰らぬ人となってしまった。

水上さんのいない居室の机の上に、シルバーの真新しパソコンが黙って主を待っている。



総文連で阿部市長を囲んで

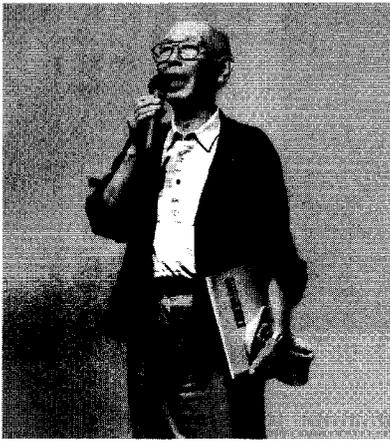
地域で育つ文化

—舞台衣装の民藝女優を描く会—

劇団民藝 田口精一

その日、久しぶりの再会に胸弾ませて、先輩U氏の個展会場に足を踏み入れた私は息をのんだ。「今回は全てをサムホールで……」との案内文に自然に軽い気持ちが生じていた自分に恐怖を感じた。

獅子は譬え小動物といえども、それを捕えんとする時、全身全霊を注ぐのだ。私たちの舞台作りでも、一幕物の難しさを十分承知している筈なのに、売れ筋の商品を並べるといふ業界の常識に染まった自分が恥ずかしかった。会場の



「民藝の女優さんを描くデッサン会」で話をする筆者

全作品が百号に匹敵する渾身の芸術であった。そして、U氏の画室の片隅に掛けられた、泥まみれの「軍靴」の十号程の絵を思い出す。初心忘るべからず。「僕は挫けそうになると必ずこの絵を見る。無き戦友の分まで生きる約束をしたんだ。」と、厳しい目で見える。

そんな彼が、賑やかに訪れた教室の生徒さん達には「上手に描こうなどと考えず、自由に描く楽しみを味わってください。」と笑顔になる。確か、「文化とは、人の命を育むもの、文化人の筆頭はお百姓さん」と言ったのは住井すすきさんだった。

像が溢れ、飢えなど想像できない世の中、遠い文化が身近になった分、心に迫る出会いも減少したように思う。

麻生の黒川に引越してきたのが、一九八二年。緑の山林は団地に変身、



『霞晴れたら』の石巻美香さん(2009年6月)

小都市と成った。文化センター落成記念公演は、我が劇団の財産である「セールのスマンの死」。滝沢修という女優の存在も、劇団民藝という名称も知れ渡っていた。

「最近感動で席を立つことができない、といった舞台が少なくなつたねえ。もっとも絵の世界も同様だけど。」と絵描きさんから声を掛けられた。魅力のある作品が少ないのか、多忙なのか。恐らく両者なのだろうが生活の中に心の余裕が

無くなつたことは確かだ。しかし、麻生区文化協会のご尽力で続いている「舞台衣装の民藝女優を描く会」の会場は全く違う。「コスチュームが座っているのではなく、役の人物が存在する。最高の贅沢だ。」と仰る。

そして参加した女優も「舞台では知ることのない観客の視線が刺すように迫ってきて恐ろしい。」

「昔、滝沢先生から『いくら良い恰好して見せても、厳しい人生を生きてきたお客様の目はごまかせませんよ。』と言われたことが、今実感としてわかります。」描き手も女優の中身をどう捉え、どう具象化するかに心躍らせている。

まさに芸術創造の場がここにある。地域文化として大切にしたい。



『来年こそは』の渡辺えりかさん(2009年6月)

麻生音楽祭特集(一)

「麻生音楽祭」を主催して

実行委員長 宗 いづみ

今年の「麻生音楽祭」

第二十四回を迎えた今年の「麻生音楽祭」は、六月十三日から七月一日にかけて開催され、出演者約二千三百人、入場者約五千人、その他「マイタウン協賛イベント」、「あさお芸術のまちコンサート」を合わせて、実に九千人以上もの方々が関わってくださった大規模な音楽会となりました。



麻生童謡をうたう会 (コーラスのつどい)

麻生音楽祭の特徴といえば、『音楽を愛するアマチュアを中心に、企画も運営もすべて手作り、近年では演奏会演奏だけでなく、裏方の仕事も講習会受講者と舞台スタッフが協力し合い創り上げている区民のための区民の音楽祭』というところでしょうか。私たち実行委員は音楽祭のスムーズな進行を支えるために、一年間かけて準備を重ねてきました。

音楽祭実行委員会の活動

実行委員会は各部門(スクール、コーラス、アンサンブル、オーケストラ)から計十二名と事務局一名、区役所地域振興課から数名で構成されています。文化協会関係は、実行委員長の私と副委員長の麻生フィルの横須賀朝子さん、また、菅原敬子会長もコーラスの代表として活動に参加してくださっています。

委員会は年間を通して平均月一



マウイ・アイランダーズ (アンサンブルのつどい)

回開かれ、運営の事務的な処理だけでなく、どうしたら音楽の素晴らしさをより多くの方に知ってもらえるか? どうしたら気持ちよく演奏に参加してもらえるか? 音楽の質を高めるために今できることは? 等々、私たちの話し合いの話題は尽きません。

実行委員会にとって、音楽祭で生き生きと演奏する人たち、それを楽しそうに聴いている皆さん、音楽会の感想を話し合いながら帰路に就く家族連れ...皆さんの笑顔が何よりの励みです。

多分、文化協会の皆さんも、みな同じ思いで活動されていることでしょう。文化・芸術全般の発展を願う気持ち、いつまでも大切にしたいと思えます。

実行委員としての秘かな思い

長生きの秘訣は、「趣味をもつこと、くよくよしないこと」だそうです。特に音楽は脳の活性化に役立ち、また仲間とともにひとつの音楽・舞台を作り上げていく喜びは、日頃のストレスを解消してくれるそうです。

ところで、男女の平均寿命を市町村別に見ると、麻生区は全国第二位(第一位の横浜市青葉区とは僅差です)を誇る長寿地区だそうです。もちろん日本は世界一の長寿国、ということは、麻生区は世界で二位:そういうえば、音楽祭にはシルバー世代のグループが多数出演し、また客席でも多くの年齢の方が音楽を楽しんでおられました。

「もしかして世界第二位の長寿は麻生音楽祭のおかげかしら」などと秘かにほくそ笑みながら、来年の第二十五回に向けてこれからも実行委員一同、張り切って活動をしたいこうと思っております。



しんゆり・芸術のまち

